

1)1956年:朝日新聞『天声人語ザ・コラム』荒垣秀雄 天の巻～【低下する山のモラル】

マナスル初登頂が切っ掛けの第1次登山ブームで日本アルプスの登山者は70万人と最高だったが涸沢を初め道徳は最低だったと。小生が18才頃で秋葉原のニッピンが流行った頃。

第2次登山ブームは1990年代の日本百名山ブーム。近年はフィットネス、山ガールブーム。山の指導標の向きを変えた(TV殺人事件放映のネタにもなった)情けない話もあったが、その後、改善された。

同年に早くも【暖冬と地球温暖化】も取り上げられている。

2)1993年;文春文庫 中野孝次「人生のこみち」～【また山歩きをしてみよう】

丹沢山のナラ枯れとボランティア活動の歴史の中に丹沢山塊のブナの原生林枯死は工業廃煙、車の排気ガスが疑われると。また不要車両他ゴミの不法放棄、ゴルフ場の大造成で自然破壊の様子が目に余る!と苦言。⇒小生も丹沢歩きで同感であったことを思い出す!

最近の調査では年代によっても変化があるがブナのキクイムシによるナラ枯れ、オゾン、鹿食害、蜂等 複雑に絡み合っている様子。

3)2008年:新潮新書 五木寛之 最終章【人間の覚悟】～【ボランティアは石もて追われよ】

大した内容でないな～と読み直していたが流石! 良く此処に辿り着いた、と共感し敬服した。

即ち1995年阪神淡路大震災の際に大勢が被災地に向かった。骨を埋める覚悟で行く熱気があったのに3年も経つと、こぼすようになった。‘初めは涙を流して喜んでいた人が慣れて自分たちを小間使いの様に使う、やってくれるのが当然と言う態度で、有難う!の一言もない、など。

⇒しかし自分は“そもそもボランティアは最後には『石もて追われる存在であるべきなのだから』

バイブルにあるように『良きことは隠れてせよ』～と。

\* 即ち外国では老後の生き甲斐として不法行為に対する社会改革活動をヴォランティアと呼ぶが日本にはそういう活動の基盤、組織、気風も無いことは老人の不幸かも知れない、と結ぶ。

(小生の裏の声)

外国は19世紀後半から、日本では1995年阪神淡路大震災がボランティア元年と言われる。

一方、小生の過去を振り返るとH社には1965年入社時から社会奉仕会(会社支援)があり昼休みに国道のゴミ拾い等の活動もしていた。⇒これが現在の小生の原点となった!